

聖刻群龍伝

龍虎の刻 5

千葉 暁

Satoshi Chiba

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 三好載克

聖刻群龍伝

龍虎の刻5

龍の仔篇 烈火の章

プロローグ

第1話 《龍馬帝》デュマシオンの息子たち

第2話 《蛮人王》ガイザス最後の戦い

エピソード

あとがき

216

209 121

11

5

プロローグ

大通りに花びらが舞った。

道を整然と列をなして進む巨人兵に降り注ぐ。ア
マルーナ名物の花吹雪は、出兵式と凱旋式が主だが、
最近ではエリダヌ国に嫁いだ第一公女スクナーの
結婚式でも撒かれた。花の季節から外れている時期
には紙の小片で代用されるが、運よく今年は暖冬で
例年よりかなり早く梅が満開になった。数日前から
市民総出で街路に散った花びらを集めていた。

沿道の建物は目抜き通りだけに高層階を住居にし
た商店や事務所ばかりだが、この日ばかりは開放さ
れ、竹で編んだ筥に花びらをたっぷり入れた有志の
屋上や屋根裏部屋への出入りを許している。

イシユカーク軍の精鋭を見つめる市民の顔は誇ら

しげである。《操兵》が人を殺傷する武器だと誰で
も知っているが、腰に携えた剣が自分たちに向けら
れないとわかっていれば逆に頼もしく映る。またそ
う思われるよう、市民の信頼を得られるように努力
を続けてきた結果だ。

ましてや今回の敵は、かつてこの国を征服し、民
を絶望の淵に落とし入れたナカーダ国の残党だ。積
年の恨みを晴らす機会とあって、市民の歓声はいつ
にも増して大きい。

普通ならば凱旋式に限られる振る舞い酒も、都の
商工会の音頭取りで沿道各所に設けられ、見物人目
当ての露店も沢山立ち、都全体が祭りのような騒ぎ
だった。

「――刷り立てのほっかほかだ。最新のイシユカーク
軍陣立て。部隊長の名前も載ってるよ！」

新聞売りの少年が掛け声をかけると、どっと人が
群がった。ヴァヌス河の流れを利用した水力による
大型輪転機が登場し、安価で素早く大量の印刷が可

能となるや新聞業が興^{おこ}った。紙媒体による報道はアマルーナが初めてというわけではない。旧帝都^{ルーフエン}でも貴族や富裕層向けに少数ながら発行されていた。購買層が限られていたのは識字率が低かったこと、印刷費用が高かったことに加え、内容が政^{まつりごと}や官僚の批判が許されず、貴族の醜聞^{しゅうぶん}記事ばかりだったことが大きい。その点イシユカークでは憶測やでたらめでない限り国の規制がなく、自由に書くことができた。

《東テラル首長国連合》内、特にアマルーナは教育が充実しており、一般庶民でも二五歳以下ならばほぼすべてが文字を読めるだけに、爆発的な拡^{ひろ}がりを見せ、現在では国内各都市に販売経路を持つ大手だけでなくも三紙があり、日々熾^{しち}烈な特ダネ競争を繰^{くり}り広げていた。

「どれどれ——」

号外を手にした市民は紙面に目を落とした。

・大将機《ソレイヤード二世》操手デユマシオン・

イスカ・コーバック

・親衛隊隊長機《槍^{ウオーゼルクラー}の操兵》操手エアリエル・サイガ・

インヴオルゲ

・副將機《ライトノール二世》操手ロナルド・フィ
ンデン

・第一操兵部隊（イシユカーク）隊長機《イカルガ》
操手ルティア・テラノス

・機動部隊隊長機《アールヴァク》（人馬重操兵）
操手ティモール・ハン

・機動部隊副隊長機《マミーア》（人馬重操兵）操
手フィーン・ランツエン

・傭兵部隊隊長機《銀熊^{シルバースティアー}の操兵》操手バルドウル
・龍操兵部隊《フォルケ・ロー》操手マトウ

その他の戦力は、

親衛隊《歩^{スィナーグ}の操兵》一〇騎、第一操兵部隊（イシ

ユカーク）《イカルガ》五〇騎、第二操兵部隊（ナ
カード）《ギガース》三〇騎、機動部隊《人馬^{セントウリーオ}操兵》

二〇騎、龍操兵（翼龍）四騎。なお傭兵部隊に所属

する機体は雑多な量産機で総勢二〇騎。

「総勢でおよそ一五〇騎か……数の上じや連邦軍第二陣の二〇〇騎より下回るんだ。大丈夫なのか」

不安な声を発すると、近くにいた男が、

「いやいや、連邦軍といっても内実は旧帝国軍が旗を付け替えただけだつて。人馬操兵や龍操兵がいるイシユカーク軍とは雲泥の差よ。まあ、第二陣の半分はドレーバ王が率いる《モントデール黒騎士団》だから結構強いだろうがな。それに《征夷大將軍》こと我らの《龍馬帝》が親征あそばすんだ。負けるわけがない」

男の手には別の号外が握られている。開陳した情報はそのから得たものだろう。

「《龍馬帝》なら数を揃えることもできただろうさ。《連合》加盟国にひと声かければ一〇〇や二〇〇はすぐ集まるさ。だけどそうしなかった。絞ったことにはちゃんと理由があるのさ」

「ほう、そいつは？」

「遠いつてことさ。大遠征と言われたルーフェンへの侵攻のさらに先なんだぜ。急拵えの混成軍じや行軍に乱れが出て辿り着くのが遅くなる。ほら、ナカードの《ギガース》なんか甲冑が重くつて足のろいだろ。あいつらは港から船で運ばれ、メサ半島のヒクソスまで行つてそこから陸路を北上するらしい。それに《龍馬帝》は戦火を拡げたくないと考えている。だから大軍を率いることをよしとしないのさ」

デュマシオン鼻傭が過ぎる内容のようだが、アマルーナ市民の心情に則しており、親征が公式に発表されて以来、新聞の売り上げは昨年の公女の結婚式を超える部数を連日記録している。

「けどよ、王さまや親衛隊長のエアリエルさまはルーフェンにいらっしゃる？」

「ああ、このまま軍勢は西に進み、連邦首都で合流つて寸法さ。ちなみに《紅》の異名で知られた名軍師サライ・ランツェン殿は連邦首都の新連邦軍司

令部に、首都防衛隊司令官のアスナス・ゼフィール殿はアマルーナに残留さ」

「じゃあ、ルーフェンまで誰が指揮を取るんだ？」
「おいおい、その号外にも書いてあるだろ？ おつと、ちよとど司令官さまの操兵が通るかかったぜ」

ロナルド・フィンデン將軍は、イシユカーク人なら誰もが耳にしたことがある有名人だ。《蛮人王》のイシユカーク占領戦以来、デュマシオンの麾下で活躍した名将だ。現在乗っている操兵は《ライトノール二世》。二代目とされているが、受け継いだのは名ばかりで外見中身共に別物だ。

イシユカーク軍では將軍職就任時に国軍制式機《イカルガ》を基にして甲冑や飾り付けを豪華にした専用機が下賜される。フィンデン機はその第一号だ。封建制が事実上崩壊し、操兵の個人所有が珍しくなった現在では、若手騎士の誰もが専用機を得ようと切磋琢磨する。

《二世》の彫金が施された甲冑は光り輝き、傷ひと

つ見当たらない。出兵に合わせて念入りに手入れを行つたせいもあるが、自分の所有物になつて以来ろくに乗っていないことが大きい。デュマシオンから国軍の全権を預けられた彼がイシユカークを離れることは滅多になく、先だつてのルーフェン行きも伝令役の翼龍に同乗してだ。

（俺も四〇を過ぎた。機体を歩かせるだけなら何とか恰好はつこうが、もはや戦場で敵と刃を交えるのは無理だろうな）

先代の旧式操兵よりはるかに乗りやすくなっているはずなのに機体の反応が鈍く感じる。つまり操手として引退の時期に差しかかった頭れだ。

（陛下のお子戦場に出るようになったくらいだから、年を取って当たり前か。まあ、一人前の騎士と認めるにはいささか年が足りてないが……）

フィンデンは映像盤越しに傍らに従う細身の機体を見る。胸に懐かしさが込み上げる。この国が《蛮人王》率いるナカダ軍に占領されていた頃、こう

して赤い《マイルフィー》型中量級狩猟機と肩を並べて占領軍と何度となく戦った。

もつとも中に乗っているのはかつての戦友ではなかった。

フィンデンは機体の胸板を映像盤ごと撥ね上げ、操手槽を剥き出しにして声をかける。

「殿下、お疲れになったらいつでも報せてください。決してご無理はなりませんぞ」

すると《マイルフィー》の装甲も開き、中に乗っていた一〇歳くらいの少年が表から見えた。

沿道からどよめきが上がる。フィンデン將軍以上に認知されている人物だからだ。しかもどの新聞もこの少年が行進に加わっていることを報じていない。「心配するな——と見栄を張りたいところだけど、行軍に加わるのは初めてだからな。途中へばって軍列を停めては皆に迷惑をかける。早めに音を上げるようにするよ」

「さすがイーヴル殿下、と感心しております」

フィンデンがかけた言葉は追従ではない。相手は従兵機の操縦練習さえ始めていない年齢だ。旧式を軍勢の歩調に合わせ、ふらつかせもせずついてくるだけでも非凡と言えた。

「《エウロス》の調子は如何ですか？ 一〇年近く旧王都の兵器倉に仕舞われていた機体でしょう」

出兵間際に参加が決まったとはいえ、仮にも王の息子が乗るのなら、もつと見栄えも性能もよい機体を用意すべきだろう。が、ルーフェンから届いた母親からの書状には昔の愛機である《エウロス》に乗せろと記されていた。期日がわずかしがなく、最低限の整備に絞り、残った日数を訓練に充てざるを得なかった。どうせ初心者に乗れば転倒するに決まっている、と外装も倉に収められていた時のままで昔の刀傷まで残っていた。

《イカルガ》にも乗せてもらったけど、こいつは新型に負けないくらいよい機体だと思うよ」

性能上は歴然とした差があるはずだが、操手と機

体には相性があり、合致すると限界と思われていた性能を軽々と突破することが往々にしてある。また長年乗った機体は部品の噛み合いがよく新造機より滑らかに動くことも知られている。

「血の繋がりもあるのですね。操手にとって操兵は己の分身、体の一部です。先代操手エアリエルさまのお子である殿下を《エウロス》が受け入れるのも当然です」

「それだけに怖いよ。傷でもつけようものなら母さんにどつかれるに決まってる」

フィンデンは笑った。親衛隊隊長の息子への鉄拳教育は王宮に出入りする者ばかりでなく、新聞ダネになつたくらい広く知られた話だった。

イーヴルは急に真面目な顔になり、将軍に話しかける。

「さっきの返事と矛盾するかも知れないけど、特別扱いは控えてくれ。母さんの我がままでいきなり俺の参陣が通達され、混乱を招いたと聞く。これ以

上の迷惑はかけたくない」

フィンデンは沿道の市民に聞かれることを気にしたが、操兵の集団が立てる行進音と歓声では聞き分けられるわけがないと判断した。

「確かに王宮では揉めたようですね」

フィンデンは苦笑いを浮かべるも、すぐに真顔になり、

「軍ではイーヴル殿下の参陣を大変な名誉として受け止めております。殿下はいずれイシユカーク軍を、いえ新連邦軍をも率いる御方にございます。戦場の空気を吸うことも貴重な経験となりますでしょう」

王族への気遣いではなく、フィンデンは心からそう思い、励ましの言葉をかけた。

第1話

《デュマシオン龍馬帝》の息子たち

西方暦1844年2月
帝国暦239年2月



ロナルド・フィンデン

1

デマシオンには二男二女の子がいるが、男ふたりは共に庶子だった。イーヴルは公式寵姫にして親衛隊隊長エアリエル・サイガ・インヴォルグが生んだ子で第二公子になる。権力志向がまるでない愛妾は、息子に体を鍛え、武芸を磨くよう言い聞かせた。将来、腹違いの兄である第一公子アーカディアの支えとするためだ。

これまではそれで波風が立つことはなかった。異母兄弟ながら仲は良好で、イーヴルは母親の指図とは無関係にアーカディアに敬意を抱き、自身は常に身を引いて兄を立ててきた。だが子どもたちが成長し、後継者問題が国家の重大事として論議されるようになって、単に当人同士の問題では片づかなくなってきた。

アーカディアが嫡出子であれば論議の必要もな

かっただろう。あるいは庶子でも母親がそれなりの家の出であれば単純だったかもしれない。

「——イーヴルは無事旅立ちましたか？」

イシユカーク王妃サクヤーは王宮の居室で出陣式から戻った女官長にそう訊ねた。

「はい、万事遺漏なく」

シヴィルは気持ちを一切表情に出すことなく短く応えた。旧帝国の皇宮で皇族の世話をする侍女の制服として採用されていた、青地ドレスに純白の前掛けをつけている。《水晶宮》で警護官をしていた頃はこの恰好で通したが、侍女を束ねる立場に昇進してからは普通のドレス姿に改めたはずだ。むしろ式典に使用人の衣裳で出席できるわけがなく、戻ってから着替えたのだろう。

主人であるサクヤーは訝しいものを覚えながらも、問い質すこともなく、自身が抱える後悔を口にした。「やはり式に出席すべきだったわ。イーヴルは突き放されたような気になったのではないかしら」

「ご懸念には及びません」

と、女官長は即座に否定した。

「出発前挨拶にこられた際も王妃さまの身を案じていたではありませんか。血の繋がりがなくとも母親に対する敬慕をお持ちにございます」

「だとよいのだけど……」

サクヤーは呟くように言う、表情を沈ませた。

具合がよくないのは事実だ。が、無理できないほどではない。やはり心の中でイーヴルの参陣を好ましく思っていないからだろう。

イーヴル個人に対しては含むところはまったくない。同い年の男子と比べても体がひと回り以上大きく、気性もさっぱりして些事に拘らない。将来大物になることが予感できる子だった。赤子の頃から養育を委ねられていたが故に、実の子と変わらぬ愛情を注ぎ、イーヴルも応えるが如くよく懐いていた。

「ご報告したいことがございます」

わずかに陰が籠もる声を聞いてサクヤーは察しが

ついた。

「アーカディアね。欠席したの？」

「はっ……昨日ようやく所在を突き止め、式典の責任者アスナス・ゼフィール閣下と共に重要性を説き、ご出席を願ったのですが……」

サクヤーはもう一度息をつき、

「糸の切れた風ね。こうなるとルイスを手放したことが惜しまれるわ。あの者くらいでしたものね。糸をしっかり握れたのは」

悔やみつつも、ルイス・ユードイスのエリダヌでの活躍を伝え聞いているだけに、娘スクナーの従騎士の任を解き、帰国させるわけにもいかない。

「王妃さまの命を無視したことは甚だ遺憾ながら、アーカディア殿下の不在はむしろ好都合でございます」

そう前置きして、王族唯一の出席者第二公女スワミーが政府閣僚や連合加盟国の大使、集まった見物人の注目を浴びたことを告げた。

サクヤーは笑みを浮かべて、

「《小皇女》として民から愛されたスクナーが国を去り、宮廷も寂寥せきりょうの感が拭えず、まだ幼いスワミ―では代わりは務まらないと決めつけていましたが……ちやほやされたいだけのわがまま娘にも、ようやく公女の自覚が生まれてきたのかしら」

「スクナーさまもスワミ―さまも、共に皇家の血を継ぐ高貴なる御方にございます。私見ではございますが、むしろ姉君さまより妹さまのほうが《皇女》と呼ばれるに相応ふさわしいかと存じます」

シヴィルは帝国貴族の息女だっただけに王女としてはさまざまな点で規格外だったスクナーより、ごくごく平凡なスワミ―のほうを好んでいる。また前侍女長が名付け親だっただけにスクナーの世話を一身に引き受け、警護役だったシヴィルが直接関わる機会が少なかったという理由も含まれる。

「加えてシヌノラ・ミ・ドルベールさまが介添え役を立派に果たし、大層な評判でございました。スワ

ミ―さまと並び仲睦なかむつまじそうになざれているところなど、絵画にして後の世に伝えたくまりました」

サクヤーは女官長の言葉を聞き咎とがめる。

「まさかとは思いますが……あの者は王家の列に並んだのではないでしょうね？」

「そ、それは……」

言い淀よどむシヴィルを見て王妃は懸念が当たったことを知る。

「確かにシヌノラはクリティサスから招いた婿候むこ補のひとりです。しかしデュマシオン陛下に引き合わせさえしていないのよ」

昨夜から続く頭痛がにわかにひどくなり、目を閉じて顔を左右に振る。

「ロミナならばこのような失策を見過すごすことなく片づけたものを……だとしてもアスナス殿がついていながらどうして？」

項垂うなだれていたシヴィルが顔を上げる。

「恐れながらゼフィール閣下に非はございません。

わたくしめが王妃さまのご尊名を出し、席を移させました」

サクヤーが息を飲む。が、さすがに感情をすぐさま表には出さず、側近の顔を注視して隠された意図を知ろうという考えに落ちた。

「……理由を述べなさい」

「アーカディア殿下擁立の動きを牽制するためにございます」

その言葉はサクヤーの推測にあったのか、驚いた様子もなく「続けて」と先を促した。

「此度のイーヴル殿下の派遣軍同行は、エアリエルさまの発案と伺っております。王族の男子が軍務に就くことは古来よりの慣わしであり、寵姫さまにおかれましても深い意味はないかもしれませんが。しかし第一公子を本国に留守居役に残し、第二公子を戦場に連れ出すのはアーカディア殿下が上、イーヴル殿下を下と、この国の民を始めとして、お集まりの各国大使に示したことになります」

「序列は何年も前に決しているのよ。今さら蒸し返すことでもないわ」

「イーヴル殿下に一躍注目が集まったことが問題なのです。たとえ戦見物するだけとしても、デュマシオン陛下のご親征に血を分けたご息が同行を許された。ご帰還の暁には一枚箔が付くことは必定。ましてやイーヴル殿下は日頃から兄であるアーカディア殿下の右腕になると公言なさっております」

その点はサクヤーも漠然とした不満がある。だから連邦首都からイーヴルを参陣させるようにと指示がきた際も年齢の若さを理由に反対した。

「王妃さまはイーヴル殿下を軍にお加えになるならばシヌノラさまも、と願いましたね。自覚あつてのことではないようですが、クリティサスの婿候補をアーカディア殿下の対抗者として担ぎ出すお気持ちがあつたからではないでしょうか？」

そう言われると、サクヤーも自分の心がわからなくなる。どちらにしろ、シヌノラの参陣があつさり

退けられたことを不快に思ったことは確かだ。

シヴィルが絨毯に膝をつき、首を差し出すがごとく頭を下げた。

「どのような理由にしろ、王妃さまの名を勝手に使い、重臣の方々を恣意的に動かしたことは万死に値しましょう。どうかお氣が済むようにわたくしめをご処分ください」

サクヤーは迷った。シヴィルのしでかしたことは明らかに臣下の分を逸脱している。判断は司法に委ね、誤解の打ち消しに全力を注ぐのが現実的かつ賢明な対処だろう。しかし旧帝都からきたシヴィルをサクヤーは失いたくはなかった。そして遣り方問題があるとはいえ、彼女の憤りは理解できるし、自分の意に沿ったものと言えなくもない。個人的な好悪はあるだろうが、少なくとも自身の利益のためにやったのではない、と確信できた。

ふう、と三回目の長いため息をつく、
「今回ばかりはあなたの忠心に免じて許します。デ

ユマシオン陛下のお叱りは受けるでしょうが、大戦を控えており、どんなに早くとも三月はご帰国なされないはず。その間に謝罪の手紙を送り続ければお怒りも鎮まりましょう」

この処置を始めとするシヴィルの偏重はサクヤーの評判を大いに下げるのだが、賢妻として知られていた王妃も、嫉妬と同郷意識によつて目が曇っていたと言わねばならない。

出兵式の後、公安局局長のロシェ・ランガーは珍しく自宅に戻った。

最上階に設けられた専用玄関で出迎えた妻に、

「殿下はお見えになつてゐるか」と、訊ねた。

「一昨日ふらりと立ち寄つた後は一度も」

セーラは夫から受け取つた外套と帽子を壁にかけながら応える。内心嘘がばれないかびくびくしていたが、特別用事があつたわけではないようで「そう

か」と言っただけで、書斎にまつすぐ向かった。

こういう時ばかりは郷紳街きょうしんがいの高級集合住宅はあ
りがたい、と思う。夫は寒がりさむがりで帰宅時に部屋が暖
まっていないとひどく不機嫌になる。だから冬の季
節は帰宅時間に合わせて居間の暖炉に火を絶やさな
いよう心がけていた。しかし誰もいない部屋で暖房
を続けることは不経済（セーラは一日の大半を厨
房で過ごす）だし、そもそも外に愛人を囲う夫が毎
日帰宅するとは限らなかった。

郷紳街に引越してきてからはそのような気遣い
は無用になった。建物の地下に大型の汽缶きかんが設けら
れており、全館に張り巡らした導管内に湯を循環さ
せて暖房しているのだ。冬場の暖房費はそれだけで
庶民ならば一家五、六人の生活費に相当するほどの
高額だが、政府の要職にある夫はまるで頓着とんちやくしな
かった。

ナカーダなかたから出稼でかせぎにきている小間使いの娘は、
『蛇口ひねを捻ひねるとお湯が出るなんて女にとつて天国で

すよ』と感激しているし、同じ集合住宅に住む奥方
連も郷紳階級であることを実感できると肯定的だ。
生まれながらの貴族であるセーラのほうが罪の意識
を感じるのには皮肉というべきか。

一〇年前までイシユカークは同じ辺境とされる周
辺の国々と比べても貧乏びんぼうだった。平地が少なく農業
に向かず、輸出に回せるような鉱物資源もなかった。
他国に誇れるものと言えは、硝子工芸ガラスだけだった。
セーラの実家も時には当主みずか自ら鋤すきを振るって領民
と汗水を流す小領主で、貴族の一員であるから最低
限体面を保たざるを得なかったが、日々の暮らしは
質素儉約を当たり前のように実践していた。

デュマシオンが王位に就き、国内の反乱勢力を一
掃、周辺国との戦に勝利すると状況は一変した。強
大な権力を背景に、東テラル地方を一個の経済通商
圏として枠組みを改めた。すると閉塞へいそくしていた社会
が一挙に開放され、物も金も人も動き、経済は活況
を呈ていした。さらには何世紀にも亘わたって制限されてい

た、大陸の反対側《東方》を結ぶ《交易路》を再開させたことで新たな風穴を開けた。

同時にデュマシオンは地場産業の活性化にも力を注いだ。元々イシユカークの硝子工芸は世界市場で高い評価を得ていたが、所詮趣味嗜好の産業で飽きられれば客離れも早い。どうにか基幹産業まで育てるべく匠合ギルドの職人と一緒に頭を使った。

その第一弾が眼鏡だった。イシユカークで製造される硝子は他国のものと比べて無色で透明度が高い。その利を活かし、庶民でも購あがなえる安価で質がよい眼鏡を売り出した。これが当たって外貨獲得に貢献した。が、それでも基幹産業と称するには至らない。

そんな頃、画期的な製造法が発見された（正確には昔から知られていた技術なのだが、大がかりな設備が不可欠とされ見送られていた）。イシユカーク産の硝子は無色透明が特長と記した。逆に言えばそのような作るのが難しいことを意味する。さらに製造困難だったのが薄く平らに伸ばすことだ。当時の

窓硝子は熱を加えて柔らかくした材料を回転させ、遠心力で平らにしたものを切断し、枠に組み込んでいる。その方法だと研磨しても真ん中に軸の跡が残るし、そもそも面積の広い板硝子が作れない。

大きく透明で、かつ歪みのない板硝子の製造は職人技だけでは実現不可能、と知ったデュマシオンは、遷都予定地の近隣に巨費を投じて国営の硝子工房を建てた。原料を加熱する熔解窯の燃料として天然瓦斯田が利用できるからだ（現在は都市内の照明、暖房にも使っている）。新宮殿《水晶宮》は巨大な板硝子をふんだんに使った従来の宮殿様式とはまったく違う、美しくも斬新な姿を見せ、完成式典に全国から集まった招待客にイシユカークの板硝子を大々的にアピールした。なにしろ他では真似ができないものだけに、西部域のみならず遠い東部域や南部域からも注文が殺到した。さらに成形後の研磨を不要とする新技術が確立して単価を下げるや、購買者が王侯貴族や富裕層だけでなく大衆にまで拡がって

った。

需要の高まりと共に国営工房は大きくなり、多くの職人を受け入れたばかりか、原料となる珪砂や石灰石などの採掘、製品の輸送などで多くの雇用をもたらした。また硝子窓を入れる家が増え、都の商店は商品を硝子で覆って陳列する手法で売り上げを伸ばし、建築需要を掘り起こす効果もあった。

貿易中継地としての利もあり、連合首都アマルーナは右肩上がり経済成長を続け、今ではかつて政治経済の中心地だった帝都を上回る繁栄を見せていた。

(すべてではデュマシオンさまのお陰……)

心の中で感謝しながらもセーラは贅沢を遠ざけ、田舎の領地で祖母や兄と暮らしていた頃のままの慎ましい生活を望んでいた。

酒肴を携えて書斎に入ると、夫は部屋に備えつけの酒を開けて飲み始めていた。見たところ機嫌がよいのか、杯を唇に当てながら笑みをこぼしていた。

「ついに王妃が馬脚を顕したぞ」

ロシエは前触れもなく妻に告げた。

何のことかセーラにはわからない。

「派遣軍の出兵式があったことはおまえでも存じておろう。その式典でクリティサスから派遣されてきた若い貴族がスワミー公女の介添え役としてながら王族の席に列したのだ。しかも欠席した王妃の指図なのだという」

「拙いこと、なのでしょううか？」

妻の返事にロシエは焦れて、

「相変わらず血の巡りが悪い女だ。たかが席ひとつとはいえ、各国大使も臨席する公式行事で王族の一員として扱ったのだぞ。シヌノラ・ミ・ドルベールをスワミーの婿として発表したも同然だ」

セーラも事の重大さに遅ればせながら気づき、

「連邦首都のデュマシオンさまが認めたことでしょうか？」

するとロシエはにやりと笑い、

「婚約という王家にとつての慶事^{けいじ}を、情勢不安定なこの時期にやるわけがない。間違いなく王妃の勇み足であろう」

「そ、そんな……賢く控^{かじこ}え目な王妃さまが、陛下^{ないがし}を蔑ろにするような振る舞いをなされるはずが……」

「どうか？ イーヴル殿下の出兵について周囲に不満を漏^もらしていたことは確かだ。まあアーカディア殿下を王位に就かせたくないという思いが表に出てきた、とわしは分析するがな」

ロシエは王位継承者としてアーカディアを推^おしている。が、その動機は国にとつて最善の選択と信じてではなく、自身が将来権力を掌握^{しやうあく}する足がかりにするため、即ち野心からだ。故に障害となるであろう王妃の失態は彼にとつて好ましい出来事だ。

「……………」

セーラの心は千々に乱れた。彼女の望みは国家の安泰であり、デュマシオンとその家族がつつがなく

暮らすことだ。王国の後継者を巡って夫婦が対立する事態をどうして喜べよう。

そんな妻の心情をロシエは洞察していた。むしろ苦しめるため伝えたのだから性根がねじくれている。「さてと……殿下がおられぬのならば、長居する意味がない」

そう告げると、ロシエは杯を置いて出かける気配を見せた。

「役所にお戻りですか？」

その問いにロシエは応えず書斎を出た。下町に囲っている愛人宅に泊まるのだらう、とセーラは察したがあえて問い質しはしなかった。

「馬車呼びます」

郷紳街だけに辻馬車^{つじばしゃ}の車庫が近くにあり、小間使いを走らせれば玄関前まで迎えにきてくれる。

「無用だ。下に車を待たせている」

通りは駐車禁止区域だが、公用車は取り締まりの対象外だ。ましてや公安局局長の乗り物となればな

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。